

三 次の文章を読んで、問いに答えよ。

(白露の姫君は、自分のもとに通わなくなった少将の君との関係に悩んでいた。)

かくてのみ思しわづらひつつ、はかなく月日のたち過ぐれば、「いとうらめしう、かく跡もなく絶え果て給ひにけること。せめてはかなき一くだりにても、折々につけて聞こえ通はし、おのづからかれがれなる様にもし給はんこそ、世の常のことはあらめ。にはかにひき切りたる様になり給へるを、心ゆかぬわざにもあるかな。さるあはあはしき人の御ありさまとも見え給はざりしかな」と、女房などはいとほしがれど、女はさしも漏らし給はず。御心ひとつに、「さればよ」と、いとあぢきなう思ほし嘆きたり。さりととも、よもやかばかりにてはと、人知れず待ち給へれど、いとかくおほつかなくて、秋も暮れ果てにければ、「いかなる御風心地にても、さやうにもし給へるにや」とて、こなたに参り通ふ便りにつけて、かごとばかりのこと問はずれど、「さる御悩みにても」とも聞こえさせず。ゆくてばかりの言つてだにかき絶えたれば、「よし、さばかりにてやみ給へね。あいなき憂き名にたち騒がれ、人わろき恥に身をやつさんより」と、少しは猛き方もあれど、さすがに「この人々のいかが思ふらん。言ひがひなくて、飽かれ奉りけん、わが身の怠りに聞こえなさんが、よろづのことより心やまし」と思し乱れて、ひたすらに起きも上がらず、ただ、涙にのみまつはれ臥し給へるを、御妹などの、御仲うるはしければ、いといたう嘆き聞こえて、御そばを去らず付き添ひ暮らすを、北の方なほ安からずのたまひ制すべし。父君のみこそ、さは言へど、情け情けしく、母君なく、て心細からんを思しやりつつ、よろづのことを仰せ掟て、折々は渡らせ給ひ、御けしきなど御覧じたり。

杉子ひとり心知りにて、「げに、さ思し入るもことわりぞかし」と、いと悲しう見奉りて、かしこき占方うらなひの人に物問はせなどし、また、我がする心の占にも、「むげに捨てさせ給ふとは見えぬ。ただ、いささかのたがひ目により、思しわづらふ筋ありて」など、いづれもいづれも聞こゆれば、いか様にかと思ひめぐらすも、いとなかなかなる心づくしなり。しめやかなる宵の人間ひとに、みそかに近うさしよりて、「いとさかしきわざには侍りつれど、あまりいぶせき心のままに、おのれ親しき勤かまへの人に忍びてさることうかがはせつれば、かなたのなほざりはゆめゆめ侍らぬよし、これかれに心見させても、さやうにのみ申し侍るを。あま

りつれなき御心ざまを、こなたより少し驚かし聞こえ給ふまじくや^④。いみじき便り求め出でしを、よろしきひまに伝へさせん」とささめけば、「いと便なきこと。何かは、かばかり御心と古るされ奉りながら、我が身の醜きありさまにて、人をばかこち奉るべき。よし、絶えざらん縁ありなば、おのづから思しなほらん」など、さすがに思し入りぬる様にて聞こえ給へば、「なぞ、かう埋もれたる御心ざまぞ。我からの過ちにてだに、人をうらむる世のためしなしとばかりや思すべき。あしきこと計らひ聞こえて、かくばかりやは聞こえさせん」とて、御硯とりまかなひて、書かせ奉る。しかすがに、御心の隈なきほどを、いたづらにとは、え思されねば、しぶしぶながら書き給ふ。御言葉などなつかしくて、憎からぬほどにかこち給へるも、いとらうたげなり。奥の端に、

うとまるるつらさを人にうらみても言ふかひなきは我が身なりけり

とばかりすさびて、いと小さくひねりてうち置き給ふを、いま一重かい包みて袖に引き入れて持ちて立ちたり。したしき下仕へに仰せて、「これ、かしこに」と聞こえ知らせつつ、「あなかしこ。あだに漏らすな」と、いと懇ろに聞こえ付くべし。

(「白露」による)

注 母君＝白露の姫君の実母。

杉子＝白露の姫君の女房の一人。

勘へ＝占い。

- 問1 傍線⑦の「世の常のこと」の説明として、最も適当なものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。
- 1 男からのちよつとした手紙でも、受け取った女は自分を気に懸けてくれていると信じるものであること
 - 2 常に優しかった男が急によそよそしくなると、自分に非があるのではないかと女は悩むものであること
 - 3 他の女とも交際するような軽薄な男には、女の方から別れを切り出して関係を解消するものであること
 - 4 男女の仲は、これといった特別な理由もないまま次第に愛情が冷めて疎遠になっていくものであること
 - 5 相手に飽きた男は徐々に手紙のやり取りを減らし、少しずつ関係が終わるよう仕向けるものであること